資料名　泣いた赤鬼　（光村図書４年ｐ60　「友情、信頼」友を思いやって、光文３年 p68、「主として人との関わりに関すること」友情、信頼、学研未来　4 年 p48　「主として人との関わりに関すること」友情、信頼）

１．資料について

昔から人間関係に関連して様々に読み解かれてきた話である。教材自体はいろいろなことが考えられる素材だと思われる。ただ、光村本では赤鬼の気持ちを聞く設問が二つあって青鬼の気持ちを聞く設問がないのがバランスを欠いているように思う。また、第三者の目で二人の関係を見ようとする設問もない。学研未来は問いが開かれたものになっていて、役割演技をしながら考える構成になっている。しかし、光文や学研未来本にあるような「本当の友だちとは、どのような友だちか考えてみましょう」という問いに対し、「本当の友だち」を「自己犠牲をともなった友情」？というまとめ方にならないような、多角的な視点で考えられる進め方が必要に思う。

鬼は昔から人を食ってきたのか、赤鬼は人をだまして友だちになったわけだが、それはよいことなのか、青鬼はそれに進んで加担したことになるが、それはよいことなのか、うそで始まった人間との友情は本物か、だれかを悪者にして盛り上がったことはないか、どうしてだれかを悪者にすると盛り上がるのか、今もそれに近いことはないか等々論点は多すぎて収まりきらないほどだ。

光村本は「友だちのあたたかさを感じたことはありますか」という問いに終わっているが、きれいごとで終わらせるのはもったいないのではないだろうか。

２．本資料を教材として使用する場合、特に注意すべきだと考えたこと

光村教科書該当箇所の冒頭にある「友だちを大切にするってどういうことかな」という問いを考えていく素材にしたいと考えた。この問いは「開かれた問い」なのでできるだけ幅広く検討したい。設問の設定をともすれば光村本のようにきれい事で終わらせない工夫が必要である。

３．指導過程(2 時間程度の計画)

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	「鬼」が出てくる話をいくつか紹介して鬼についてどんなイメージを持っているか聞く。お話しを朗読する。	子どもに読んでもらっても良い。
展開	5 人くらいのグループに分ける。 ①グループで感想を話し合う。 ②グループで寸劇を作る 設定は次の通り a.1 年後青鬼が帰ってくる　赤鬼は青鬼のことなど忘れて人間と楽しい日を送っている。 b.配役　青鬼、赤鬼、人間(3 人) 進行役は特に決めず皆で相談しながらすすめる ③すべてのグループが寸劇を演じる(5 分)演じ終わったら劇の解説をする。 全体で質疑応答	設定はクラスの実態を考えて変えてもよい。たとえば１年後という設定だけであとは自由とか、最初からまったく自由で子どもに任せても良い。

まとめ	教師としての感想を述べる。	できれば全ての班に寸劇に触れると良い。

４．参考資料　なし